中国現代文学事典

丸山　昇
伊藤虎丸 編
新村　徹

中国現代文学事典

丸山　昇
伊藤虎丸 編
新村　徹

東京堂出版

編者略歴

丸山　昇（まるやまのぼる）一九三一年生まれ。一九五三年東京大学文学部卒業。現在東京大学文学部教授。著書に「魯迅――その文学と革命」「魯迅と革命文学」その他がある。
現住所――東京都大田区中央六―六―六。

伊藤虎丸（いとうとらまる）一九二七年生まれ。一九五七年東京教育大学卒業。現在東京女子大学文理学部教授。著書に「魯迅と終末論」「魯迅と日本人」その他がある。
現住所――東京都小金井市梶野町二―六―四一。

新村　徹（しんむらとおる）一九三六年生まれ。一九五九年愛知大学文学部卒業。一九八四年十月、交通事故で死去。死去当時、桜美林大学文学部教授。著書に「魯迅のこころ」その他がある。

検印省略

中国現代文学事典　定価四九〇〇円

昭和六〇年九月二五日　初版印刷
昭和六〇年九月三〇日　初版発行

編者　丸山昇　伊藤虎丸　新村徹
発行者　澄田譲
印刷所　株式会社三秀舎
製本所　協和製本株式会社

発行所　株式会社　**東京堂出版**
東京都千代田区神田錦町三ノ七　〔〒一〇一〕
電話東京二三三局三七四一　振替東京三七〇

1598-160279-5164

©1985　Noboru Maruyama
Toramaru Ito
Toru Shinmura

まえがき

中国現代文学は、その起点を文学革命におけば、ほぼ七十年の歴史を積み重ねたことになる。その間、中国人民とその文学は、あの戦争と革命を、またその後の建設をめぐる多くの曲折を、そして現在の中国では「十年浩劫（十年の大災厄）」と呼ばれているあの「文化大革命」を体験した。

その間の人間的・文学的体験が、豊かな内容を持たぬはずはない。現にある中国現代文学が、その豊かな内容を十分に汲みつくしているか否かについては、さまざまな考え方があり得ようが、少なくとも可能性として含まれている豊かさを正確に認識し理解することは、日本人の精神生活にとっても、重要な意味を持ち続けるだろう。

しかし、中国現代文学を理解するといっても、それは単に主観的な善意や好みによって可能になるわけではあるまい。かつての中国文学研究会の時代の、日中両国の文学者の間に存在する同時代性を根拠にしたアプローチや、戦後の一時期に強かった、中国革命への共感と敬意を出発点としたアプローチが、それぞれ貴重なものを残したことを、今でも私たちは認めるが、現在の私たちにとっては、それだけでなく、中国文学と私たちとの間にある距離を認識したうえで、その距離を埋めるために何が必要かにつ

いての方法意識と、急速に増加している資料が十分活用されるように整理されることとが、強く求められている、と思われる。

そんなことを考えているところへ、「中国現代文学事典」を作らないか、という話が持ち込まれたのが、「文革」終了後まだ日も浅い七八年の春だったと記憶する。先行するすぐれた業績である「中国新文学事典」（中国文学研究会編、一九五六年、河出文庫）が出てから数えて、すでに二十年余が経過していた。そろそろ新しい中国現代文学事典があってもいい、誰か作ってくれないか、と思っていた時だったので、自分で作る話にはいささかためらったが、そのうちに、やってみるか、という気になって来た。ちょうど私たちの研究会に、若い研究者が集まっている時でもある。彼等の力がうまくまとまれば、多少は新しいものができるかも知れない、と一種使命感めいたものを感じたこともある。

それからあっという間に、約七年の歳月が経ってしまった。執筆の過程では、研究会のメンバーのほか、それぞれの専門家にもお願いすることができ、より充実したものにすることができた。結果として予定の倍以上の年月を費してしまったのは、主として仕事の段取りについての、編者の不慣れと不手際によるものである。でき上ってみると、項目の選定にも叙述にも欠点が目につく。また従来のものに比してかなり詳しいものを作った年表については、できる限り現物に当る方針をとったが、資料的制約もあり、誤りも残っていると思う。読者の叱正を得て、将来よりよいものに改訂していきたい。

最後に、この事典が、人名に対し事項を相対的に重視していることについて、多少の説明をしておき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

たい。当初は人名をこの二倍ぐらい収め、それに事項をつける、といった、いわば常識的なものを考えていた。各種の雑誌等に出て来る頻度なども調べなおし、それをもとに、数百の人名見出しカードも用意した。そこに、中国で「中国文学家辞典・現代部分」二巻（一九七九、八二、四川人民出版社）が出た。いろいろ不満もあるが、項目数でも、作家の経歴や作品名やその発行年などでも、さすがに本国の強みで、日本ではここまではできない、と思う点も少なくない。われわれが作ろうとする事典が、かなりの部分これに依拠することになれば、たとえ散見される誤りを訂正することはできるにせよ、全体としての意味は半減することになる。そこで人名を日本の一般の読者にとって役に立つ範囲にしぼり、代りに社団、雑誌等の事項を大幅に増やすことにした。作家・作品の理解のためにも、その周辺がもう少しわかり易い形になっていることの必要性を、かねがね感じていたからである。

残念だったのは、編者の一人でもあり、実質上の事務局長をつとめてくれていた新村徹氏が、昨八四年十月、交通事故でなくなったことである。編者の一人に対する献辞を扉に掲げるのは変則的かも知れないが、あえて掲げさせていただいたことについて、読者の御了解をお願いしたい。

一九八五年八月

編者

凡例

◇この事典は、一八四〇年以後の中国近・現代文学の、思潮・作家・作品・団体・新聞・雑誌・事項等の主なものを選定・収録したものである。ただし、中国のいわゆる「近代」、すなわち清末の部分は簡略にし、「現代」（一九一五年以降）に重点を置いている。

◇項目は五十音順に配列した。西洋人名もカナ書きにした五十音順に従う。中国の個有名詞は、その漢字音によるが、一部の項目では、助詞の類を日本語に置きかえてある（例．「中国的一日」→「中国の一日」）。漢字音は原則として漢音によったが、慣用音が定着しているものについては、漢音にこだわらず、それによった（例．南国…。なんごく　×だんごく）。また、日本語の中でも通用する中国音（例．上海…シャンハイ）もそれによった。作品名は、各作家の項の後に［　］をつけて収録した（例えば［阿Q正伝］は魯迅の項の後に収めてある）。

◇項目名の直後の→印は、別名の項目で収録されていることを示す。項目解説末尾の→印は参照項目を示す。

◇人名項目には、中国音をカタカナ及び漢語拼音方案によるつづり方で示した。拼音の声調は省略した。その後の（　―　）は西暦の生・没年を示す。没年の記載のないものは現在生存中であることを示す。？印は不詳のもの、数字の後の？印は疑問を残すもの、数字間の／は、両説あり確定し難いもの、を示す。

◇本文中において西暦年号を示す場合、一九〇〇年代のものは一九を省いた。

◇本文中では次の略称を用いた。

左連＝左翼作家連盟
文協＝中国全国文芸界抗敵協会・中華全国文芸協会・中華全国文芸工作者協会
文代大会＝中華全国文学芸術工作者代表大会
文連＝中国文学芸術界連合会
作協＝中国作家協会
政協＝中国人民政治協商会議
人代＝中華全国人民代表大会
文革＝文化大革命

◇「　」は作品（評論を含む）、『　』は単行本、〈　〉は新聞・雑誌、〝　〟は術語を示す。

◇本文中に＊印を付したものは、独立の項目として収録されていることを示す。

◇各項目の執筆者は、各項目の末尾に姓を記した。詳しくは執筆者一覧表を参照されたい。

◇参考のため、別に「近・現代文学史概説」「年表」「参考文献解説」「索引」を付した。

中国近・現代文学史概説

執筆者・編集協力者一覧表（五十音順）

青谷政明　木山英雄　杉本雅子
芦田肇　小島久代　高島俊男
伊藤敬一　小谷一郎　樽本照雄
伊藤虎丸　近藤龍哉　徳永淳子
岩崎菜子　斉藤道彦　西脇隆夫
岩松久雄　佐伯慶子　平石淑子
郭春貴　佐治俊彦　藤井省三
加藤三由紀　下出鉄男　前田利昭
釜屋修　白水紀子　松永正義
刈間文俊　代田智明　丸山昇
北岡正子　新村徹

中国近・現代文学史概説

はじめに

本書では中国の近代文学と現代文学とを、とくに区別せずに扱っている。そのことに関わって、最初に、日本と中国とでは、近代（近代文学）および現代（現代文学）という言葉が社会通念として含んでいる意味に、ある種のズレがあることを言っておかなければならないだろう。

中国で出版されている近代史あるいは近代文学史は、通常、アヘン戦争（一八四〇年）から五・四運動（一九一九年）の前までを取り扱う。それ以後は現代史あるいは現代文学史として別に扱われ、両者ははっきり区別されている。――つまり、〝近代〟とは、世界史の上で中世の封建社会が崩壊して資本主義が主流となった時代であり、中国にとっての近代とは、西力東漸、すなわち西欧資本主義列強のアジア侵略の進展の結果、中国が、それまで長く続いて来た封建社会の閉鎖的な経済をうち破られて世界経済の一環にくみ入れられ、半封建・半植民地社会へと転落していった時代である。そして、〝現代〟とは、そうした資本主義の侵入への抵抗を通じて社会主義思想が受容され、それに基づく革命運動が次第に発展するなかで、中国が半封建・半植民地の状態から脱して、社会主義思想に基づく独立した統一国家を建設していった過程とされているのである。

これに対して日本では、通常、ほぼ中国でいう〝現代文学〟に当たる五・四時期以後を中国〝近代文学〟と呼んでいる。すなわち、中国近代文学の歴史は、一九一七年に胡適、陳独秀らによって提唱された〝文学革命〟の運動と、この運動にはじめて実質を与えた翌一八年の魯迅の短篇小説「狂人日記」に始まるとされるのがふつうである。少なくとも日本語の呼び方として考えるかぎり、これ以前のものは近代文学と呼ぶにはそぐわないもので、むしろ古典文学の末期あるいは近代文学の前史として考える方が実際に近いからである。

このような〝近代〟という言葉の含意のズレは、たとえば今日中国で進められている〝四つの現代化〟政策が、我が国の新聞等ではふつう〝近代化〟政策と訳されることなどにもあらわれている。このことは些末なように見えて、実はその背景には、共に西欧列強のアジア進出を契機にして始まった日・中両国の〝近代〟の歴史の大きなちがい――たとえば、アジアの東端に位置して西力東漸の波を受けることがもっとも遅く、いわばアジア諸国民の抵抗に助けられた面もあって植民地化をまぬがれ、その後もすぐれた適応力によっていち早く一応の〝近代化〟を達成した日本と、アヘン戦争以来いくたびも西欧列強の侵略を受け、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分割の危機にさらされ、大きな混乱を経験しながらも、これを克服して社会主義革命に成功したものの、いわゆる〝近代化〟の面では遅れをとった中国、といったちがい――が横たわっているだろう。私たちの文学辞典が、この隣国との間に温かい相互理解を育てていくためのものであるなら、そのためには、このような両国民の〝近代〟という言葉への明暗を異にする受けとり方と、その背景にあった状況及び侵入して来たヨーロッパ近代文化に対する受容態度のちがいとは、まず最初に押えておかなければならないことの一つであろう。

＊　＊　＊

ところで、中国近代文学（中国でいう現代文学）の出発点を、魯迅の「狂人日記」に置き、それが書かれた一九一八年あるいは広く一九一〇年代末を考えると、日本文学で坪内逍遥の「小説神髄」（一八八五年）、二葉亭四迷の「浮雲」（一八八七年）からほぼ三〇年を経過し、日本文学はこの間、紅葉・露伴から漱石・鷗外、『文学界』のロマンチシズム、さらに自然主義、白樺派と経てきており、一九二一年には『種蒔く人』が創刊される直前にあたる。いわば中国の近代文学は日本のそれに比べてもほぼ一世代の遅れをもって誕生したことになる。中国で書かれた近代文学史では、たとえば、中国の近代は被侵略・被植民地化の時代で、資本主義や近代市民社会は未成熟に終わらざるを得ず、従ってその反映である近代文学は、稔りに乏しいまま現代文学に移行したというふうに述べられている。このことは、言い方を変えれば、中国〝近代〟文学は、その出発と同時に、〝現代〟の課題とも取り組まざるを得なかった、というふうにいうことができよう。ここで現代の課題というのは、封建的諸制度、習慣、思想からの解放による〝個人〟の〝自由〟の獲得をいちおう近代の課題とし、その近代が残しあるいは再生産した社会的不平等あるいは新しい形で生まれた自我の行きづまり等々の問題をさすといった程度の意味であるが、アジアの多くの国々においてそうであるように、中国文学においてもこの二つの課題は最初から重なり合う形で出てきているし、社会主義となった現在においても、近代の課題がさまざまの形で残っていることは、最近とくに強く認められていることである。

以上のような理由から、私たちは、少なくとも中国文学に関して、近代文学と現代文学を区別することは、あまり意味を持たないと考える。本辞典でも両者を一括して扱ったゆえんである（ただ五・四期以前については、古典文学の流れにつながると考えられるものは出来る限り省略し、何らかの意味でその後の新しい文学につながると考えられるものだけを取り上げた）。

＊　＊　＊

さて、以上のように考えられるとすると、日本や中国を含めたアジアの近・現代及び近・現代文学は、ヨーロッパがもたらした新しい思想（人間観）と新しい科学技術や社会制度を受容して、それをはばむ旧い封建的な諸規範・体制の支配と戦いつつ、人間の権威を回復し、自分が自分の主人であり得るような新しい社会を形成していくという課題と、ヨーロッパ列強の政治経済的、文化的侵略に抵抗して、いかにして自国の政治的・経済的・文化的な独立を守り、近代的民族国家を形成していくかという課題との、ある意味では矛盾した二重の課題を、共に負っていたといえるであろう。

このような二重の課題をもたらした西欧の衝撃に、アジアの国々の文学がどのように対応したかが、それぞれの国の近・現代文学の性格を特徴づけた。その際、中国文学が持った特異性は、まずそれが、世界文学のなかでももっとも古い歴史と厚く豊かな文学遺産を持つ文学だった点にある。しかも、同じく古い歴史を誇ったエジプトやギリシアの古代文明が、すでに死んだ文明となっていたのとは異なり、中国文明は、世界にも稀有な例として、遥かな古代からずっと同一の言語を、つまり文明の同一性を保持しつづけてきていた。それは、たとえば、こうした蓄積をほとんど持たなかった一部のA・A新興国などの場合とくらべたとき、中国近・現代文学史の持ついちじるしい特色である。中国近・現代文学の歴史は、まず、西欧の衝撃を受けとめた厚い言語の層の存在と、西欧近代を容易に受けいれなかった誇り高い伝統文化――それは同時に、近代文学の担い手たちにとっては、絶望的なまでに重い因襲の累積でもあったが――の頑強な抵抗とによって特徴づけられる。

もう一つ、中国の現代文学を考える前提としてとらえておかねばならないのは、新中国の建国まで、中国は文盲率がおそらく九〇パーセントを超えると推測される社会であったことである。列強の侵略や、度重なった内戦等による物質的困難を別にしても、この一事だけで、中国近・現代文学が置かれてきた条件が、いかに困難なものであったかを知ることができよう。中国の近・現代文学は、一方では、巨大な伝統文化の重みに抵抗しつつ、他方では、知識人と民衆との間の大きな断絶を埋めるべく、時には不毛とも見える荒大な原野に鍬を入れ、新たな作物を生み出す営みにも近かった、といってよい。

日本文学は文学から思想まで中国文学の深い影響の下にある。同時に以上のような両国の伝統文化の異質性と両国近代の社会的諸条件の差異とを実証的に把握し直すことが、中国近・現代文学理解の第一歩である。その差異の認識から、実はアジアの近代が共に担う〝共通の課題〟も見えてくるし、温かい共感と相互理解も生まれるだろう。これはまだ始まったばかりの新しい学問である。

I、近代文学の前史

近代史の起点—アヘン戦争期

中国近代史は通常アヘン戦争から書き始められる。一九世紀が〝アジアの悲劇〟の世紀とよばれるように、すでに一八世紀の六〇年代に産業革命を経たヨーロッパの資本主義列強の、市場と原料を求めるアジア進出は新しい段階に入り、古い封建的な体制のなかに眠っていたアジア諸国を次々にその植民地や保護領に転落させつつ、しだいにその終点—中国と日本—に迫っていた。内部的にも、康熙・乾隆と栄光を誇り太平を謳歌していた清帝国も、すでに一八世紀末（嘉慶初年）の白蓮教徒の乱（一七九六～）以来、漸くにその矛盾をあらわにしつつあった。アヘン戦争（一八四〇～四二）においてイギリスの砲艦の威力の前に一敗地にまみれた中国は、南京条約によって、いわば力づくで鎖国を破られ、否応なしに世界市場に引きづりこまれた。関税自主権を失った中国は、外国商品の流入を防ぐ手だてを持たず、経済は混乱を起こし、階級分化が激しくなり、閉鎖的な封建経済は崩壊し始めた。「この時から中国社会は封建社会から半封建・半植民地社会に変わりはじめた」（毛沢東「新民主主義論」）のである。この時以来、イギリスによる第二次アヘン戦争、ロシヤによるアムール地方・沿海州の占領、フランスのインドシナ侵略（第一次・第二次清仏戦争）等々……、清朝は敗北と譲歩を重ねていくことになる。

こうして社会経済史の上での中国近代の幕が開かれるが、ちょうど日本の場合でも、黒船の到来から二葉亭四迷や北村透谷が出るまでには二、三〇年のズレがあったのと同様に、文学史の上では中国近代文学の成立は、なお六〇年ないし八〇年のちのことになる。それまでの時期は、近代文学の前史—古典文学から近代文学への過渡期—と考えられる。

アヘン戦争を反映した文学としては、まず当時の知識人（たとえばアヘン焼き棄ての当事者だった林則徐など）の詩文がある。その中には、平英団（アヘン戦争のとき、広州附近の三元里という村で農民が組織した抗英自衛団）の勇敢な戦いをたたえた張維屏の長詩「三元里」などが含まれる。また当時の農民によってうたわれた民謡のなかには、外国侵略者への怒りや、外国侵略者には弱腰で民衆には強権をふるう封建支配者とに対する嘲りが素朴な言葉でうたわれているのを見ることができる（これらは近年になって発掘されたもので、たとえば阿英編の『鴉片戦争文学

集』などに収められている)。

こうした作品は、西欧列強の侵略に対する民族的抵抗の貴重な記録ではあるが、文学史の上からいえば、なお古典文学の延長であって、新しい文学につながるものではない。同じく古典文学の範囲に属するものでも、その後の文学への影響という点からいえば、より重要なのは、公羊学派の人たちの作品である。彼らの学風は、清朝の学問の主流だった考証学とは異なり、経世致用の学と呼ばれて、学問と社会実践との結びつきを重んずるもので、その後、清末の思想界に大きな役割を担うことになった。

この時期の公羊学者としては、龔自珍と魏源があげられる。とくに龔自珍の詩は、異常なまでに鋭い感覚で中国の危機を予感した深い憂悶を唱っており、その「己亥雑詩」は、清末の志士たちに広く愛唱され、大きな影響を与えた。

太平天国期

列強の資本主義の侵入によって農村経済の破壊が進むとともに、中国民衆の抵抗も強まり、やがて太平天国革命の運動(一八五〇~六四)となって南中国を中心に全国を革命の渦に巻き込んでいく。太平天国の思想は、(1)農民一揆の伝統と、〝天朝田畝制度〟と呼ばれた土地改革などにみられる古くからの農民的な平均主義、(2)弁髪を拒否して髪を蓄え、清朝を韃靼人の政府と呼んだような民族意識のめざめ、(3)とりわけ、指導者洪秀全が宣教師を通じて知ったプロテスタンティズムの影響を受け、徹底した偶像破壊や男女平等を実行し、儒教の経典を〝妖書〟と呼んで破棄するなど、儒教思想そのものを否定した点で、在来の農民一揆とは異なる思想革命の側面を持ち、従ってまた、少なくとも当初は、そこから生まれるある種の〝禁欲のエトス〟(厳正な軍規やアヘンの禁止など)を持っていた(それらは後の人民解放軍にもうけつがれたといわれる)。

文学の上では、太平天国は、こうした思想に基づいたある種の〝文学革命〟を唱え、形式面では民衆の言葉である口語文を尊び、〝古典の言〟に反対して、文章は「人をして一目瞭然たらしめ」ねばならぬとし、内容面では「言は心に従うを貴ぶ」「文は以って実を記す」べきことを唱え、〝浮文〟〝巧言〟をきびしく警めた。洪秀全・楊秀清・洪仁玕らの詩文にはこうした作風を見ることができる。悲劇的な死をとげた将軍、石達開は詩人としても名高い。また近年になって収集された民謡には、農民の素朴な解放の喜びや太平軍への賛美やその敗北後の追憶などが唱われていて、後の人民文学初期の民衆詩を思わせるものがある。

洋務運動期

太平天国軍との戦いで、かつては精強を誇った満州族の軍隊(八旗兵)は無力を暴露した。太平天国を鎮圧したの

は、列強の干渉軍と、曾国藩・李鴻章ら漢人の大官僚が組織した義勇兵だったが、太平天国の鎮圧後、彼らの手で、〝洋務運動〟と呼ばれる一種の改良運動が積極的に進められ、清朝は〝同治の中興〟と呼ばれる相対的安定期を迎える。

太平天国が、いわば〝下から〟の、農民一揆のエネルギーと結びつき、プロテスタンティズムという近代思想の影響を受けて、封建的な儒教思想そのものを否定する思想運動という側面を持つものだったとすれば、洋務運動は、儒教思想に基づく清朝の封建体制を護持するために、西洋の軍艦などの機器や技術の輸入、ないしは軍隊・工場・学校などの新制度の採用によって富国強兵をはかろうとする、〝上から〟の〝近代化〟運動だったといえよう。その思想は、「中学（中国の学問つまり儒教思想）を体となし、西学（西洋の技術）を用となす」（張之洞「勧学篇」）という言葉に端的にあらわされている。

洋務運動はかなりの成功を収め、たとえば李鴻章らが力を注いだ北洋艦隊は、〝定遠〟〝鎮遠〟以下の巨艦を擁して東洋一の威容を誇り、日本をはじめ各国に恐れられたが、文学や思想の面では、右のような、儒教を根本とするという洋務運動の思想を反映して、伝統詩文は、（文における〝桐城派〟の中興、詩における〝同光体〟など）一般に復古の傾向を示し、小説も興味本位に流れ、陳森「品花宝鑑」（一八五二）、魏秀仁「花月痕」（五八）、韓邦慶（子雲）「海上花列伝」（九二～九四）などの遊里小説の系統と、文康「児女英雄伝」（五〇）、石玉崑「三侠五義」（七九）などの侠義小説の系統とが主流を占めた。

近代文学への道程としてより重要なことは、この時期に、外国との接触が深まるにつれて開港地の都市を中心に、近代ジャーナリズムの成立が認められることであろう。

中国における近代ジャーナリズムの起源は教会ジャーナリズムに求められる。明末・清初に渡来したカトリック宣教師が、典礼問題にからむ内紛で総撤退を余儀なくされたあと、それに代って新しく資本主義の波にのって中国伝道にのりだしたプロテスタント宣教師たちは、伝道の手段として、漢字の新聞や雑誌を発行したが、そのさきがけは、ロンドン伝道会のモリソンで、彼がマラッカで発行した『察世俗每月統紀伝（Chinese Monthly Magazine）』（一八一五～二一）が中国で最初の漢字の新聞（雑誌）だとされる。アヘン戦争の結果、香港がイギリスに割譲されたのちは、出版事業も香港が中心となる。一八五八年香港の『徳臣報（Hongkong Daily Press）』が華文版の夕刊『中外新聞』を出したのが、中国における最初の日刊新聞とされる。

その後、上海でも一八六二年に『字林報（North China Daily News）』の華文版『上海新報』が創刊され七二年に

イギリス人メイジャアーらが『申報』を出し、競争となるが、『上海新報』は敗れて停刊し、以後『申報』が事業を独占し、その利益によって点石斎石印書局、図書集成鉛印書局、申昌書房等々をも経営し、中国を代表する新聞になっていく。雑誌では、北京で月刊『中西聞見録』（七二）、上海では半月刊（または週刊）『益聞録』（七八）が創刊された。いわば、この時期に、中国における商業ジャーナリズムが成立したということができよう。そしてそれはやがて、「海上花列伝」の著者韓邦慶のような、科挙（官吏登用試験）に志を得なかった知識人に才筆を振う場を与え、清末の小説隆盛の背景ともなっていく。

この頃になると、教会ジャーナリズムも、伝道記事のほかに科学知識や世界事情の紹介に力を入れ、宣教師のなかには、イギリス人ティモシー・リチャードなどのように、中国の改革を説くものもあらわれた。そしてそれらは、中国知識人の眼を世界にひらかせ、やがて、次の時代の改革運動—変法維新運動の源流の一つにもなっていく。たとえば、初期の改良主義者のひとり、広東の商人鄭観応の「盛世危言」（一八九三）（毛沢東が少年時代に愛読したという）などは、そうした教会ジャーナリズムから材料を得たといわれている。

また、こうした外国人による出版事業が盛んになるなかで、中国人自身の手による新聞雑誌刊行の必要性が認識され、艾小梅主編の『昭文日報』（七三、漢口）を最初に、王韜の『循環日報』（七四、香港）、容閎の『匯報』（同、上海）などがあいついで創刊された。それらは、日本の初期の新聞と同様に、多かれ少なかれ政治的主張と教育的目的を持ち、それらのなかのあるものは、厳しい言論抑圧の中で、政府批判の拠点ともなっていった。こうして長い封建支配を改革しようとする気運は、次第に動き始めていった。

Ⅱ、近代文学への胎動期

日清敗戦と進化論の紹介

さて、洋務派官僚の富国強兵政策が一定の成果をあげつつあるかに見えたとき、日清戦争（一八九四～九五）で同じアジアの小国日本に敗れたことは、中国知識人に大きな衝撃を与えた。それまで列強から蒙ったたびたびの敗北にも「頑固高慢という習性をいささかも改めようとしなかった」中国人が、はじめて「四千年の夢から醒めたのは、甲午の役（日清戦争）からのことであった」（梁啓超「改革起源」）。康有為・梁啓超らを中心とする〝変法維新運動〟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c